乳幼児における言語レジスターの獲得

池田彩夏

論文要旨

他者とのコミュニケーションの円滑な実施は、私たちが常に直面している課題であり、自分が置かれた状況に応じて様々に振る舞いを調整することでその達成を試みる。その調整の 1 つが発話調整であり、使用言語の文法ルールに則った「正しい」言語情報の生成だけでなく、情報が伝えられる状況に「ふさわしい」方法での伝達が求められる。特に、相手や状況によって変化する話し方は言語レジスターと呼ばれ（Hudson, 1980）、適切で一貫した言語レジスターの運用が可能になるのは 6 歳以降であると報告されている(Anderson, et al., 1999)。しかし、その理解の発達プロセスの全容は明らかではなく、検討すべき課題が残っている。

先行研究によって、聞き手と言語レジスターの組み合わせの理解の開始は運用よりも早く、言語回答を求める課題では 3 歳児でも理解を示すことが報告されている(Wagner, et. al., 2014）。しかし、乳児が発達早期から乳幼児向けの特殊な話し方である対乳幼児発話や大人向けの対成人発話、非母語などの話し方を区別し、また、性別や年齢、人種などの社会的カテゴリを形成していることを踏まえると（e.g., Fernald, 1985, Zmjy,et al., 2012)、3 歳未満の乳幼児でも言語レジスターに理解を示す可能性がある。つまり、従来の言語回答を求める課題では、その発達を十分に捉えきれていない可能性が大いにある。そこで本研究では、低年齢児における言語レジスターのルールの理解を検討するとともに（第 2 章)、その学習メカニズムの解明のため、言

語レジスターの学習源である養育者に発話の包括的な記述を試みた（第 3 章）。また、言語レジスターの理解を検討した先行研究は、そのルールの理解にのみ着目しており、それを使用することの社会的意味の理解、つまり、不適切な言語レジスターの使用（e.g. 目上の人に向かって友達口調で話す）が人間関係に悪影響を与えうることの理解については扱ってこなかった。この問題を踏まえ、幼児及び成人を対象に言語レジスター使用の社会的意味の理解についての検討を行うこととした（第 4 章）。さらに、対乳幼児発話に関しては、多くの文化で使用が報告されてはいるものの、なぜ使するのかに関しては、理由が明確でない。そこで、第 3 章で取得したデータを使用し、格助詞省略に焦点を当てて詳細な分析を行うことで対乳幼児発話の発話動機を探ることを試みた（第 5 章）。

第 2 章では、低年齢児でのレジスターのルール理解を明らかにするため、他者との言語を介したコミュニケーションが劇的に増加する時期の 20 ヶ月児を対象に、注視時間計測を用いた検討を行った。まず実験 1 において、対乳幼児発話と対成人発話が特定の聞き手（乳幼児 or 大人）と結びつくことを理解しているかを、期待違反法を用いて検討した。その結果、20 ヶ月児は対乳幼児発話で話しかけられるのは乳児であると予測していたが、対成人発話で話しかけられるのは大人であるとは限らないとみなしていた。これらは、生後 20 ヶ月の時点ですでに、部分的には言語レジスターと聞き手の組み合わせを理解していることを示唆する。実験 1 の結果を踏まえ、実験 2-4 では、言語レジスターのより一般化されたルールとして、言語レジスターは聞き手によって変化する、つまり、話し手ではなく聞き手と密接に関係する話し方であることまで理解しているのかを、馴化スイッチ法を用いて検討した。参加児は 2 種類の映像刺激への馴化後、4 種類のテスト刺激を提示された。馴化刺激は、「大人が対乳幼児発話で乳児に話しかける映像」と「大人

が対成人発話で大人に話しかける映像」だった。テスト刺激のうち、最初の1つは、馴化刺激のうちの1つと同様の映像（ベースライン）だった。残りの3つの刺激は、ベースラインと比べると、レジスター、聞き手、話し手がベースラインで使用されなかった馴化刺激と入れ替わっていた。つまり、言語レジスターのルールを理解しているならば、レジスター変化条件と聞き手変化条件ではベースラインよりも注視時間が伸びるが、話し手変化条件では注視時間は伸びないと予測できる。実験の結果、予測通りの注視パタンが得られた。コントール実験（実験3）の結果、本実験で見られた注視パタンが、馴化時の学習の結果である可能性は排除された。さらに、実験4の実施により、実験2・3で用いた実験パラダイムの妥当性が確認された。従って、生後20ヶ月ですでに、言語レジスターの一般化された抽象的ルールを理解できていることが示唆された。これらの研究は、言語能力が未熟な生後20ヶ月児による言語レジスターへの感受性を示し、言語獲得初期に母語の文法ルールだけでなく、言語運用の学習も始まっていることを示唆している。

第3章では、乳幼児の言語レジスター獲得メカニズムを検討するための基礎データの構築を目的とし、1-3歳の発達段階の異なる子を持つ60名の養育者による対乳幼児発話と対成人発話を取得し、その変化を包括的に分析した。分析の結果、全体として対乳幼児発話は対成人発話とは大きく異なり、育児語やオノマトペの使用および格助詞の省略が多く、発話長が短かった。しかし、細かく分析すると、子の発達に伴う調整が見られ、3歳児向けの発話は、1-2歳児向けの発話に比べ育児語やオノマトペの使用が少なく、また、格助詞を省略する頻度が少なくなった。さらに、文の長さに関しても、1-2歳児向けの発話に比べ、3歳児向けの発話は発話長が長く、1-2歳児向けの発話は長さが比較的一定であるのに対し、3歳児向けの発話は長さにばらつきが見られ、長短、様々な発話長の文を用いることが示唆された。以上より、

大きな発話の変化が 2 歳から 3 歳の間に生じていることから、第 2 章においてレジスターのルールの理解を示した 20 ヶ月児を含む、生後 1-2 年の間は、比較的安定した言語レジスターの入力を得ていることが示唆された。

第 4 章では、5 歳児、7 歳児、成人を対象に言語レジスターが持つ社会的意味の理解の検討を行った。実験では、話し手が聞き手（大人・乳児）に対し、適切なレジスターあるいは不適切なレジスターで話しかける場面を提示し、その際の聞き手の気分の評価を求めることで、不適切な言語レジスターの使用が聞き手に与える印象の理解を検討した。加えて、不適切な言語レジスター使用を、他者の社会的評価に用いるのかも併せて検討した。その結果、5 歳児とは異なり、7 歳児と成人は適切な言語レジスターの使用時は聞き手の気分が良いと判断した。さらに成人は、大人に対して不適切なレジスターで話しかけると相手に不快感を与えると判断した。つまり、5 歳児は言語レジスターの選択ミスが聞き手に与える印象に理解を示さなかったが、7 歳児は理解を示した。しかし、その理解は不完全であり、レジスター使用の社会的意味の理解には比較的時間がかかることが示唆された。また、不適切な言語レジスターの使用の社会的評価への利用は 7 歳児と成人でのみ見られ、大人に適切なレジスター（対成人発話）を使用している話者から学習することを選択し、乳児に適切なレジスター（対乳幼児発話）を使用している話者を好む傾向にあった。これらの結果により、今まで未解明だった、言語レジスター使用の社会的意味の理解の発達過程の解明が進んだと言える。

第 5 章では、養育者の格助詞使用に着目した詳細な分析により、使用理由が不明確な対乳幼児発話の発話動機の解明を試みた。その結果、格助詞の省略傾向は養育者の持つ信念と関係しており、子どもには対乳幼児発話を話すべきだと考えている養育者ほど格助詞を省略する傾向にあった。また、格助詞やそれが付与する項の省略されやすさは、子どもの年齢や格の種類、自動

詞他動詞の別によって異なり、文理解の可能性を保持した状態で、できる限り情報量を削った結果であることが示唆された。従って、養育者が聞き手である乳幼児の理解力を考えた結果として、対乳幼児発話を用いている可能性が示唆された。

以上の研究を受け、第 6 章では、言語レジスターの獲得に関して、乳幼児による言語レジスターの理解の発達過程の再整理を行い、その獲得メカニズムおよび、今後の展望を議論した。乳幼児における言語レジスターの使用と理解の発達プロセスの解明において、本研究が新たに加えた知見は 2 点ある。1 点目は、言語回答に頼らない実験手法を用いることで、生後 20 か月という、これまでの知見と比べると、かなり早期にレジスターのルールの理解が始まっていることを示したことである。2 点目は、今まで未検討であったレジスターの持つ社会的意味の理解を検討し、5 歳から 7 歳にかけて理解が進むことを示したことである。さらに、養育者による発話を詳細に分析し、言語レジスターの学習源記述及びレジスターの使用意図の推定を試みたことで、レジスターの獲得メカニズムおよびレジスター使用の実態の解明のための重要なデータを提供したといえる。

今後の課題としては、レジスターの獲得メカニズムの解明や他の言語レジスター（e.g., カジュアルな対成人発話、フォーリナートーク）の獲得過程の検討が挙げられる。また、多言語話者において見られる言語の切り替え（i.e. コードスイッチング）と言語内でのレジスターの切り替えの類似点と相違点の検討や、言語間、文化間のレジスター発達の比較も重要だろう。さらに、コミュニケーションに困難を抱える自閉症者など、非定型発達児におけるレジスター発達の解明を行うことで、レジスターの使用、さらには他者とのコミュニケーションを不得手とする人への療育・サポートなどにつながることが期待される。